

ヒルデガルトの中世ヨーロッパの全体性医療

問題意識の所在

- ① スピリチュアル・ケアとは何か。
- ② 霊あるいは魂とはなにか―霊[魂]と身体とはどのような関係にあるのか。
- ③ 「癒える」（恢復する）とはいかなる意味か、それは何を根拠に可能であろうか。

I ヒルデガルトの全体性治療

A) ジグヴィツァの症例

- ① すでに7年以上病んでいるジグヴィツァという「悪霊にとりつかれた若い高貴な女性」がいる。
- ② 「正しい感覚と行動を奪われて、しばしば叫び、見苦しいやりかたで振舞った。」
- ③ ブラウヴァイラー修道院ですでに一度大掛かりな悪魔祓いを経験しているが、悪霊は再度、すぐさま舞い戻った。
- ④ 「民衆を長い間不安に陥れた女をじかに見たり声を聞くようになるこの女の到着に始めはかなり動揺した。だが男の人の手を借りることもなく、この病人を修道女たちの住まいに連れて行った」

B) 悪魔憑きについて

- ① 「私は真のヴィジョンの中で、この症状はある悪魔によって一つの球の中に集められた黒い影と煙が神の許しの下に、その娘を暗くしたものであるとみたのです。これが彼女の理性ある魂の敏感な部分の全域を圧迫し、彼女の高い理性[深い知恵]をもって行う祈りを許しませんでした。」 ●⇒3)6)12)以下「悲しみの霧・蒸気」
- ② 「(悪魔はその本来の姿で人間に入ることは許されないので) 黒い影と煙の形で人間に浸透して正気を失わせる。人間の内部に住み着くのではなく、身体各部を外部から動かしているに過ぎない。その間、人間の魂は眠ったようになっており、肉の体が何をしているか知らない」(『ヒルデガルトの生涯』253～254P) ●霊の本来的な働きを阻害している状態
- ③ 「たいていの人は、発狂した人を悪魔に取り憑かれていると考えがちだが、そうではなく、悪魔は狂気の働きに応じてこの病苦に近寄り闇討ちにするのである。」(90 狂気)

- 「しばしば叫んだ」と描写されるこの叫びには女性特有の抑圧と、それへの怒りを推測させるが、ヒルデガルトは怒りの奥に悲しみを見、体液の変化を見、その奥に更に魂の働きを見、こうして全体的な治療法と処方決定される。(後述⇒II)

C) 具体的な薬草の処方と治療

- ①精神錯乱(狂気)への処方
 - 1) 帽子の着用
 - 2) フェネルとコストマリー

② 怒りへの処方

1) 香りの療法

「ローリエの乾燥漿果にセージ、マジヨラムの乾燥粉末を加えたものを小箱に入れ顔の近くに置く。（『病因と治療』怒り）

●「正しい感覚と行動を奪われた」ジグヴィツアの理性に、香りが働きかける。

2) 塗り薬

「この粉末の一部を少量の冷たいワインと混ぜ、額、こめかみ、胸を清めるとよい。」

3) 食事療法

1. かゆ

「油ではなくバターかラードで作ったセモリナ（訳注：小麦の粗びき粉）のかゆ。これは脳の虚ろを満たし、脳の冷えを温める。」

2. スープ

「ナツメグとカヤツリグサの粉末にグラジオラスの根とオオバコをすり潰したものに塩を入れ、小麦粉と水を加えた薄いスープを作り、これを飲ませる。」

3. ワイン

「ワイン、蜂蜜酒、ただの水は避ける。フェンネルとコストマリーから造った醸造酒とビールはよい。」（168 狂気）

③ 瀉血療法

●薬草の処方に瀉血が加わるのが一般的である。瀉血には性別・年齢・季節・瀉血量などの細かな規定がある。その他、乱切法を用いることもある。

D) 共同の祈り

①自分たちの修道院と、修道院を取り巻く周辺の地域共同体の住人全員に、聖母マリアの清めの日（2月2日）から復活祭前日の聖土曜日に至る少なくとも50日を越える期間、ジグヴィツアのために祈りと喜捨が求められ、断食と苦行が捧げられる。

② 抜魔式

1) 1170年の復活徹夜祭を直前にした聖土曜日の夜、抜魔式の儀式が行なわれる。

2) 司祭は洗礼盤に湛えられた水を聖別し、水に息を吹き込む。

3) ジグヴィツアは恐れおののき、その細い足は地面を掘るほどに震え始め、口からは霧のようなものを吐き出す。

4) 「サタンよ、この女の体という仮小屋から立ち去れ。」

5) 不純な霊は重いおりものとなって体外へと排泄される。

●ジグヴィツアの精神に、悪と向き合えるだけの総合的な力が与えられる。「抜魔」とは、魂[霊]の働きを阻害するものを取り除くことである。（後述）

II 病一感情・肉体・魂

A) 症状と病理

「人の魂は自分や自分の体にとって 1) 逆らうなにか (aliquid adversi: something adverse) を感じ取ると 2) 心臓や血管そして肺を収縮させ、3) 心臓のまわりに霧のようなものが立ち昇って、4) 心臓を曇らせる。それで人は 5) 悲しくなる」

「心臓を覆っていた 6) 悲しみの霧は、7) すべての体液の中や胆嚢のまわりに温かい蒸気を生み出し、この蒸気は 8) 胆汁をかき立て、9) この胆汁の苦みから 10) 怒りが生まれる。」

●悲しみから転化した怒りが治まらずに継続した場合、どのように精神を錯乱させるのか、そのメカニズムが次に述べられる。

「11) 怒りが治まらないと、12) 蒸気は黒色胆汁にまで達し、13) 黒色胆汁をかき立てて黒い霧を外に送り出す。」

「14) この霧は胆汁に浸透し、15) 胆汁から非常に苦い蒸気が生み出される。やがて 16) この霧は蒸気とともに脳まで達して有害な体液をかき立て、まず最初に 17) その人の頭を病気にする。18) ついで胃まで下りてゆき、19) 胃の血管と胃の内部を襲い、20) その人をまるで錯乱状態のようにする。こうしてその人は知らぬ間に怒り出すのである。」

(『病因と治療』145 悲しみと怒り)

- ① 2)～20) 臓器反応の連鎖：魂⇒(心臓・血管・肺)⇒心臓⇒胆嚢(肝臓)⇒脳⇒胃
- ② 2)～20) 精神的反応の連鎖：「錯乱⇒怒り⇒悲しみ⇒魂の不快感」と、魂へと遡る。
—①②は現下の症状から遡って原因に迫る。
- ③ 1) 「逆らうなにか」[敵対するなにか]を感じ取るのは、魂の自然的な働きである。
- ④ 9) *amarus* (*bitter*) の原義：「苦い・悲しい・感情を害する・不快な・嫌悪すべき」
—感情を表す言語は同時に身体感覚を表す言語であること。

B) 悲しみの根源(怒りの奥にある悲しみについて)

①「アダムがリンゴを食べ、善を知り、悪を行ったとき、アダムのこの矛盾がもとで、彼の中に黒色胆汁が生じた。…これがもとで悲しみと絶望とが生まれた。」(142 アダムの墮落と黒色胆汁)

②「人間が神の御旨に背いたとき、その心と体は変質した。…罪を犯した後は、すべてのものは別のもの——すなわち苦いものに変質したのである。」(33 アダムの墮落)

●胆汁の苦さと心臓における思念の苦さ

③「黒色胆汁は黒くて苦く、すべての病気を引き起こす元である。…この黒色胆汁はいかなる慰めも疑念で覆うという悲しみをもたらす。こうした人は天上的な命の喜びを感じることも、地上的な慰めに喜びを感じることもない。人がその初めに悪魔に唆されてリンゴを食べてしまい神の戒めに背いたそのときから、この黒色胆汁はすべての人間にとって本性となった。」(38 黒色胆汁)

●黒色胆汁は、原罪の記憶の体への刻印である。

● 黒色胆汁の生み出す「悲しみと絶望」とは「疑念」＝「いかなる慰めをも覆う疑念」のことである。それは神から離反した人間の本質的な悲しみ—人間の自然的本性である神性（知恵）—神からの離反と逸脱—魂の不快感（天上的な喜びと地上的な慰めの欠損）として、ヒルデガルトは見ている。

● 逆に見れば、病は、体液の氾濫を通して魂の深部に導く働きである。病とは魂が、身体的・精神的自然からの逸脱を言い当てる作用であると同時に、根源的な状態に戻ろうとする人間の本性の叫びでもあるということが出来る。

④ 「(悪魔は)嫉妬と憎しみと嘲笑という悪しき感情に起因するすべての悪事をなすもの」
(『生涯』255P 要約)

⑤ 悪霊 (daemonum:demon) : 「ルチフェルとともにこの世で謀を企むもの」

悪魔 (diabolus:the devil) : 「ルチフェルの食欲さと意志力を体現」

⇒「人間の魂を眠りこませるもの」＝魂の働きを覆い隠すもの

● diabolus (悪魔・サタン) の原義は「中傷者」、新約では「試みるもの」(マタ4-3/1テサ3-5)。

● 『靈操』解説で門脇は仏教における根本的な煩惱(罪源)を「貪(ドン/むさぼり)」「瞋(シン/いかる)」「癡(チ/おろか)」としているが(「懺悔文」に同じ)、diabolusは「癡」に通じるという共通点がある。

C) 「甘い—苦い」—魂(あるいは身体)の感覚

① 「心臓に思念があるとき、その思念は甘さか苦さかのどちらかをもっている。甘さは脳を豊かにし、苦さは脳をからにする。思念に甘さがあると、その人の目、耳、口は喜びを表す。思念に苦さがあると、目は涙を流し、口と耳は怒りと悲しみを表す。」

⇒Ave Generosa の歌詞における「甘美な」の頻出⇒靈操の身体的感覚

② 「自然に反した、無理な影響が、それも一気に起こる場合には、この影響は「苦しい」もの[苦い/苦痛]であり、逆に、自然の状態へと一気に戻る影響は、「快い」ものである
(『ティマイオス』116P)

● 『ティマイオス』では「甘い—苦い」は理性から送られてくる思念の肝臓における反映である。(131P)

● イグナチオは靈動弁別の感覚を「憂鬱」と「はればれ」としているが、ヒルデガルトのこの感覚は「甘い」「苦い」であって本源的な生命の感覚に近いのではないか?

● まとめ (魂—感情—身体の関係)

肝臓(感情)	心臓	脳	魂
怒り(苦い)	悲しみ—苦い	虚ろ(癡)	都合の悪いもの—不快—疑念(癡)
喜び(甘い)	甘い	豊か	快—慰め(⇒ハーモニー)

- ① 怒りは脳から派生する感情というより肝臓に位置する身体的感覚として握まれる。その怒りの奥には心臓の感知する「悲しみ」があるが、この「悲しみ」の根拠は、原罪に遡る「疑念に覆われた絶望」である。この疑念は「天上的な命の喜び」も「地上的な慰め」をも覆ってしまうが、この喜びと慰めから遮断された感覚を、魂は「苦い」ものとして一すなわちもっとも始原的な感覚である「不快」として表出する。
- ② 肝臓とは動物的生命力の位置するところでもあり、したがって怒りという感情は動物的生命力が不快を感じたときの身体的発現ということになる。怒りという感情は人間の中の低次の動物性＝生命性の発現であるが、感情・思念・理性は本来的に魂それ自体の活動でもある。怒りの奥にある「悲しみ」は心臓の「苦い」思念の表出を通して、魂にとって「不快なもの」を告発し、魂は自らの働きとして低次の動物性から霊的・人間的に昇化してゆく自己回復運動でもある。——この働き自体が「救済」の根拠であるという意味において、救済とは、人間の人間化を意味する。
- ③ 魂の快・不快と身体感覚としての快・不快は近い関係にある。(⇒識別の重要性)
- ④ スピリチュアル・ケアとは、怒りや悲しみなど表出する諸感情の奥に潜む、魂の快—不快の感覚を感じ取れるように手助けすることではないだろうか。

III 臓器と魂

臓器（心臓・脳・肝臓）

- ① 「魂は心臓に位置し、窓を通り抜けるようにして思考し、燃える火が煙突を通り抜けるようにして思考力を脳に送り出す」「脳は思考を心臓で識別し、思考を体に広げる。」(同上 95 「魂の居場所」)
- ② 「知識は心臓に属し、感情は肝臓に、ふいごの機能と理性の回路は肺に属する。」
- ③ 「脳は本来湿っていて脂肪質であり、人の分別や知恵、理解力の質料 (materia : material) である。…脳はまた思考する力をもっている。」
- ⑤ 「肝臓の獣的欲望に対する「理性」の反応が心臓の「怒り」として現れる」「心臓は脳と肝臓との対応関係を反映する部位である」(プラトン『ティマイオス』129P 要約)

●まとめ

	主体液	プラトン	ガレノス	ヒルデガルト	
大脳	白色粘液	理性の霊	精神の霊	火の力	思考力・理解力の質料
心臓	血液	感情の霊	生命の霊 *1	魂の場	思念/思考の識別 *4
肝臓	胆汁	強い欲望の霊	自然の霊 *2	液汁の器 *3	感情

*1 プネウマは左心室で精錬され、動脈により全身に運ばれるが、ガレノスはプネウマを勘案しなくても自説は証明できるとしている(ガレノス『自然の機能について』129P)

*2 自然の霊(生氣)は肝臓に座をもち、このプネウマは静脈により全身に配られる。

*3 肝臓は心臓や肺、胃がその液汁を注ぎ込む器のようなもので、体のあらゆる部分にその液汁を注ぎ返す。(『病因と治療』「器としての肝臓」)

*4 思念 (cogitationes : thoughts) は心臓にあり、その思念が甘いときは脳を豊かにし、苦いときは脳をからにする。脳は思念を理解する。

●プラトン3霊説はガレノスにより「血流説」に採り入れられ、3つの臓器で「霊」(肝臓=自然の霊・左心室=生命の霊・脳=精神の霊)が作用・発生するとされた。

(⇒「ガレノスの血流説」の図参照)

●身体の諸感覚は魂の生きた働きである。

●ヒルデガルトにおける「精神」は、「肉体と精神」という対置の中で与えられる概念的な幅はもたず、ほとんど「意識」という程度に狭い概念で使われる場合が多い。

●脳はヒルデガルトにあつては必ずしも主要な身体的器官としてではなく、「狂気」の項で、感情の作用する場としていわば病的に扱われる。

●胃についての特異な身体思想 : 「人間は天地と一切の生きとし生けるものすべてを自身のうちにもつ」という「宇宙=人間」で見た人間論が基本にある。諸物を人間の内に取り込む一つの重要な行為が「食べる」ということであり、それを司る胃は、その宇宙論的な身体の中心的な臓器として位置づく。

IV 霊・魂・身体

A) ギリシャにおける「魂」(プシュケー)

① 「ギリシャ語プシュケーは、前5世紀から4世紀にかけてのアテナイの一般人にとっては、……「生命原理」を意味するにすぎなかった。だが、ピタゴラス派が死後の魂の存在を信じ、来世に向けた魂の清めの重要性を信じたことから、魂は人間の本質的部分という理解に深まってきた」(ブラック『プラトン入門』155P 要約)

② 「プラトンにあつては、魂はイデアを感得することのできる部分のことである。——魂は移ろいゆく非実在的な感覚世界と永遠の実在的なイデア世界のギャップを橋渡しするもの」(同上 155P)

B) 霊と魂の一般的な区別

	ヘブライ語	ギリシャ語	ラテン語
霊	ルーアク	プネウマ	スピリトゥス
	霊・風・息	霊・風	風・匂い・息・霊
魂	ネフェシュ	プシュケー	アニムス
	魂・精神・心	生命・魂・精神	生命・魂・精神・意識

C) 『病因と治療』における「霊」

① 主の霊—火と命—が被造物の各々に、その本性に応じて命の息を吹き込んだ。こうして被造物は、その本性に応じて、その内に火と命を持つに至った。

- ② 「聖霊はその露をもって分別の生ける力（viriditatem）を満たす。こうして人は自分が知りたいことを知り、理解するようになる。」（同上 67）
- ③ 聖霊は人間の本性全体を貫いている。…ありふれた人間の本性は、聖霊の炎によって、自分が思うよりもずっと善性の高い本性へと変えられてゆく。⇒「本性は善であること」

D) 『病因と治療』における「霊と魂」の相関性

- ① 霊は（胎児の中に入ると）形相全体を経巡り、髄と血管を再び満たして強める。…（やがて）胎児は動くようになる。それは全能の神の意志を通して、生ける風——すなわち魂が形相に入り、形相を強めるからである。魂はこの形相を命あるものとし、形相の至るところを駆け抜ける。（62 魂の注入）
- ② 人間の魂は天から、神から人間の中に下り、命を与え、理性を育む。魂が人間を離れるとき、魂は死ぬのではなく、生の報いに向かうか、永遠に課される死の苦痛に向かうか、そのいずれかである。（21 魂の力）

E) 『病因と治療』における魂

- ① 魂は火と風と湿の性質を持つ。それは人間の心臓全体を支配している。（43 人間の内部）
 - ② 魂は体に送り込まれるがゆえに、魂は息として存在する。（45 魂の注入）
 - ③ 人間の魂は火の性質を持っており、四つの元素を自らに引き寄せる。この火において、魂は視覚や聴覚、あるいは同様の機能を駆使して人間を動かす。火が水の本質をなすように、魂は人間の中の特別な本質をなす。魂なしに人は生きてはゆけない。
- 魂とは神の霊が人間の中に入って命を形作って以降の霊的作用全体を指し、理性・感覚諸機能も魂の働きの現れである。

F) 『病因と治療』における「魂と身体」

- ① 「体が魂と分離している場所はない。魂はその熱をもって体全体を覆っている。人は四つの元素によって成り立っているのだが、そのうち火と空気は霊的であり、水と土とは肉体的である。これら四つの元素は人の中で結合し、人を温め、こうして肉や血、身体諸器官が形造られる。」
- ② 「体が要求するどんな仕事も、魂は体の中で実行する。体が欲し、魂が働く。もし人間が肉体をもたなければ、魂はその力の源泉を持つことがない。こうして魂は、神の作品である人間の存在全体を経巡り、人間を突き動かすのである。…このようにして人間は魂と肉体という二つの本性において存在する。」（62 魂の注入）
- ③ 「魂は善に向かう息である。肉は罪に向かう傾向をもっているので、時には魂が肉を抑えることが叶わず、罪を犯すことになる。」（84 魂と肉体の対比）
- ④人間の他の被造物との違いは4元素の調和的存在である。（⇒前回シャルトルのティエリによる人間的本性の元素的説明）

●まとめ

- ① 人間の精神を神との関係で捉えたものが「霊」であり、人間自体において捉えるとき「魂」と呼ぶ。
- ② 魂は被造物としての動物一般にも存在するが、神の霊を感受し作用する魂をもつことこそが人間の本性である。(理性に一面化して捉えるべきではない)
- ③ 体が魂と分離している場所の一つもない。魂の働きで命は形作られ、肉の諸器官・諸力は発揮される。人間は魂と肉体という二つの本性において存在する。
- ④ 魂は人間を善へと突き動かす。
- ⑤ 体液的調和＝身体的調和＝魂の調和的働きの証＝魂の作用を感じ取ることこそ人間の証である。

■参考：イグナチオ・ロヨラ 『霊操』における「魂」

魂の三能力：記憶力・理性・意思⇒脳の活動としての魂の理解

- ヒルデガルトは深い病の底でこのような3能力が無効だということを知ったのではな
いか？

⇒私の体験：「命の底で立ち上がる原初的な命の姿」ということについて。

V 中世の身体（身体論的な側面からの補足）

- 12世紀カトリックの身体(論)はカタリ派と新たに登場する近代人との緊張の中にある。

A) 肉体を穢れとする思想

- 中世とは、「まず第一に大いなる身体の放棄の時代」というものであった。

「現生に対する軽蔑—これは修道院的精神性のスローガンである—とは、まず身体に対する軽蔑である。」(ル・ゴフ「中世の身体」46P)

i) 中世期の身体観

- ① 「体は忌まわしい衣である」(大グレゴリウス 6～7世紀)

「妊娠は罪なしにはなされない」(サン・ヴィクトルのフーゴー 12世紀)

- ② 「教会は身体に対し、身ぶりの管理によって空間的規律を、禁止の暦によって時間的規律を課するのである。」

—多くの禁忌により「教例集」が多発される—個人告解との関連 (⇒M. フーコー)

- ③ 苦行着の着用・鞭打ち・徹夜祈祷・床の上での睡眠・断食

⇒これらは12世紀以降、キリストの受難を想起するための慣習として信心会が主体となって俗人にも広がる：「快樂の拒絶」

ii) 中世以前のキリスト教的身体観

- ① 「肉にしたがって生きるなら、あなたがたは死にます」(パウロ「ロマ書」)

—パウロにおける霊肉の分離

- ② オリゲネス(185-252頃)のようなキリスト教禁欲者たちの「肉体の軽蔑」

:「天の国のために結婚しないものもいる」⇒「天の国のために自ら去勢者になった者もいる」(バルバロ訳マタイ 19-12)

③ アウグスティヌスの占める位置(後述⇒Ⅲ)

B) 従属的性としての女性(ヒルデガルトにおける女性性と神の母性の関連から)

① 解消不能で男女両性の合意に基づく一夫一婦制という教会モデルの確立:1215年ラテラノ会議)

「夫は妻の身体の支配人であり、その占有権をもっている」

② 中世期は「神が我々にかたどり我々に似せて人を一男と女を創った」(創世記 1-26)より「エヴァをアダムの肋骨から創った」(1-21)という解釈を好むようになる。(⇒ⅡAで検討を加える)

C) 恢復する肉体

① ほほ笑みは中世の発明である。

⇒笑いの復権:笑う聖人フランチェスコ(私の友たる体)

一笑いは体の下等な部分から生じる。笑いは口の穢れである。

② 「涙の中に中世の謎のすべてがある。」(ミシュレ「中世の身体」104Pより)

● ほほ笑みも涙も身体の全面的な解放に至る過程での中間的な里程である。

③ 頭から心臓へ

12世紀:クレルボーのベルナル「イエスの柔らかなる心臓」:愛の感情の宿る器官

⇒この時期、キリストの傷口は右脇腹から、心臓のある左に移される⇒聖心信仰:「脳死判定」

④ ヒルデガルトにおける胃の特異な位置(③④は次回)

⑤ 一方における自由恋愛の推奨と愛の発見(「愛、この12世紀の発明品」)

「恋人が愛する女性からなにを得ようと、それが女性の自由意思によって与えられたものでなければ、何の意味もない」(アンドレ・ル・シャプラン『宮廷風恋愛論』)

1) アベラールとエロイズの往復書簡

2) トロバトゥール/ミンネ/カルミナ・ブラーナなどの音曲のヨーロッパ的な普及

⑥ マリア信仰(クレルボーのベルナルに負うところが大きい)

● まとめに代えて

① 「中世のキリスト教的身体は、抑圧と賛美の間の、卑小化と神聖化との間の緊張、釣り合い、揺れ動きに、全身をくまなく貫かれている。」(ル・ゴフ「中世の身体」13P)

一肉体性を抑圧する教会と、噴出し始める肉体の自然性的叫びの交差する時代としての12世紀

② 忌むべき肉体への侮蔑を通した死の受容は、安易で不自然な方法である。

VI ホモ・コンパティエンス(共苦する存在)

A) 「癒える」(恢復する) ことの意味

- ①ジグヴィツァが快癒した後、ヒルデガルトはジグヴィツァと同じ症状に襲われる。
 - ②そしてジグヴィツァが癒されたと同じ過程を経て恢復する。その姿は「胎児を産み終えた妊婦のような」疲労とともに、歡びに満ちていたという。
 - ③癒す者(ホモ・コンパティエンス)は、その全存在をかけて癒される者(ホモ・パティエンス)を全存在的に掴むことである。それは魂において魂と向き合うことでもある。
- 恢復するとは、魂—感情—肉体全体のハーモニーが恢復することを意味するが、それは魂の自然的な本性によっている。したがって病とは魂の復元力の作用でもある。
 - 「癒える」(恢復する)とは、智すなわち魂[靈]自身の働きの妨げを排除して回復すること(神—人関係の根源的な状態の恢復)であるが、肉体が魂の成り立ちの不可分の前提である以上、スピリチュアル・ケアとは身体の全体的な恢復を前提とする。この全体とは共同体による祈りの集積とそれへの感謝、身体を包む住環境や孤独を癒す人間関係、体を養い力を与える食事や薬、瀉血、温浴などの、その総体である。

B) 参考:「魂とハーモニー」

- ①「世界が互いに調和しあう4つの元素で構成されているように、人間も互いにハーモニーを醸す4つの体液によって構成されている。この4つの体液がそれぞれ適切な秩序と適量を保っていれば、人は安らいでおり、健康でいることができる」(『病因と治療』57 要約)
- ②「魂とは、一部の人たちが主張するように、一種の調和(ハルモニア)である」(シミアス)
- ③「神が人間に聴覚を与えたのは、天にある理性の乱れなき循環運動に、我々の内なる魂が同族とし諧調(ハルモニア)をもち循環運動を行うためである」(『ティマイオス』72P)

VII 共苦する共同体—中世修道院の例

① 生活法にとって重要な6つの要素

- 1) 光と空気=環境 音楽と香り⇒ヒルデガルトの音楽 香りと塗油
- 2) 飲み物と食べ物
- 3) 運動と安静:「運動そして安静」(モトゥス・エト・クイエス)
- 4) 適度の睡眠
- 5) 体液の排泄または保持:水分の供給と入浴=体液と力の制御⇒入浴後の塗油
- 6) 感情の中庸=怒り・恐れ・不安など心の激情から節度を守る

■参考:ベネディクト Regula から(ベネディクト:547年没)

- 1)「修道院を訪ねてくる来客はすべてキリストとして迎え入れる」
 - 2)「貧しい人と巡礼者に対しては最大の配慮と気配りをもって受け入れる」
- ②修道院の建築構造:例) 聖ガレン修道院の建築構造

●ベネディクト会則を体現した修道院建築として後世の模範となった。

- 1) 病気または高齢な修道士のための病院—僧房の東側
- 2) 貧困者と巡礼者の救貧院（オテル・ディユ:神の客たちの宿）—修道院の門の西側
- 3) 集中治療室を備えた医師の住宅
- 4) 患者浴場と瀉血室
- 5) 修道院の会堂から少し離れたところにらい病病患者専用の治療所
- 6) 新鮮な水を供給する水道施設と下水管—排水管—水洗トイレ施設
- 7) 薬草園

●修道院建築は、祈りを中心とする共同体的身体の実現であり、頭から排泄までの全身的な身体諸機能をもつ。

●教会と住居・病院と作業所や菜園など簡素な生産施設を併せ持ったひとつの独立した町のような総合的な空間であった。

●結びにかえて

病んでいることは、中世にあつては、われわれに割り当てられたこの地上での限りある生の期間に、病める者と健康な者がともに共同して両者の永遠の救済を遂行する一つの生の形式なのである」（シッペルゲス「中世の患者」）